

「スペシャル（テーマ別）セッション」提案者の弁

増田 耕一*

「秋の大会でスペシャルセッション『地表面・大気相互作用』を試行する」という話を春の大会の総会で聞いて驚かれた方も多いと思う。「スペシャルセッション」¹⁾は、その回ごとに呼びかけ人があるテーマを出し、そのテーマに沿った講演を募集してセッションを構成するものである。新方式を全会員に説明してテーマを公募するのが筋だろうが、それでは実現までに1年かかってしまうので、テーマ第1号としては3月の講演企画委員会に出されたものを取りあげることになった。試行なので来年度以降どうするかについてはまだ決定されていない。筆者は講演企画委員会の中で「テーマ別セッション」を提案するとともに、東北大学の桑形恒男さんと共同で「地表面・大気相互作用」を提案した者である。事前の広報不足を反省し、遅ればせながら趣旨説明をしたい。

1. なぜテーマ別セッションか

現在の気象学会のセッションの編成は、「大気×学」の discipline 中心になっている。一昔前（1980年ごろ）には、第1会場＝力学および総観気象、第2会場＝境界層、第3会場＝いわゆる物理気象（雲物理、放射など）というパターンがあり、いつも同じ会場に出る人が多かったようだ。最近（意識的にこの固定観念をこわしてプログラムを組んでいるせいもあるが）そうきれいには分かれられない。数値予報が気象力学の応用から物理過程も重視するようになった。いわゆる気候への関心が高まり、たとえば、地球の熱収支に対する雲と放射の相互作用の役割を研究することの必要性を感じる人がふえてきた。

エルニーニョのように、「熱帯気象」でもあれば「大気大循環」でもあり「気候」と考える人もあり、海との界面に注目すれば「境界層」でもあるような主題も現われた。惑星大気や大気進化への取り組みも discipline を横断する形になってくる。

「似たテーマの講演があちこちに散在している」という不満、「興味のある講演が同時に進行することを避けるようにプログラム編成をくふうできないか」という希望が多く出てきたのもこういう背景から来ているのだろう。講演企画委員がもっと編成に時間をかけることをいとわなければ、多少は配置を考慮できるかもしれない。しかし、会員の興味のもちかたが多様になったのだから、興味ある講演が重なるというのは、ある程度避けられないことだと思う。講演企画委員会でも、実態を反映して講演申し込み分類を修正してはいるが、わりあい小規模の改造である。Discipline 別のセッションも各領域での水準向上のために存在意義があるからである。しかしそれだけでは、各人が自分の属する（あるいは卒業した）大学・研究所・部門と関係の深い discipline のセッションで発表するという傾向は改まらない。

一方、気象学会と関連の深い国際学会である IAMAP の大会では、テーマをもったシンポジウムをそれぞれの呼びかけ人（convenor）が組織するようになっている。事前に IAMAP の各専門委員会でテーマが検討され、講演募集のときにはシンポジウムのテーマ、convenor の名前、だいたいの日程が知らされる。講演の採用は convenor の判断で決める。口頭発表を希望してもポスターにまわされることがよくある。

日本気象学会のプログラム編成が仮に IAMAP のようであったとすると、気象学の研究をしていてもその年の大会のセッションのテーマと関係がないと発表の機会がないという不満が生じるだろう。また、現在は時間を均等に配分することを考えてプログラムを編成しているから講演企画委員の負担はあまり重くないが、内容に立ち入って審査するとすれば相当の労力・時間がかかる。

* Kooiti Masuda, 東京大学理学部地球物理学教室。

1) 「スペシャル」という用語は、他のセッションを冷遇しているように聞こえる心配と、将来は従来のセッションと並ぶふつうの存在にしたいという希望の両面で、筆者として不満である。決定には従うが、本文では提案した時の「テーマ別……」を使わせていただく。

担当者に判断の権限を委任するという会員の合意も必要である。大会の性格をこのように変えることは、もし望ましいとしても、すぐにできることではない。なお、昨年からのポスターセッションの導入は、発表件数の増加に触発されたものではあるが、はみ出した講演をポスターに「まわす」ことを意図してはいない。

このようなことを考え合わせて、大会のセッション編成の大筋は従来通りとしたうえで、各大会ごとに、大会シンポジウムとは別に、事前に呼びかけ人から出されたあるテーマに沿った講演を集めたセッションを、通常のセッションと並行して3会場の一つで開くことを提案したわけである。1件あたりの時間配分は原則として通常のセッションと同じとする。テーマ別セッションで発表される内容はもしそのセッションがなくても通常のセッションで発表されたはずと（近似的に）考えると、通常のセッションの時間を圧迫はしないことになる。

テーマ別セッションへの講演申し込みは通常のセッションと同じ方式で行い、プログラム編成と座長の決定は、原則として呼びかけ人が講演企画委員会に同席して協議して行く。テーマ別セッションを開くには、大会告示（発表募集）に盛りこむため、事前に呼びかけ人が講演企画委員会に申し出る必要がある。その期限についてはまだ講演企画委員会で検討していないが、春の大会（『天気』12月号で告示）については10月の秋の大会のときまで、秋の大会（5月号）については3月の講演企画委員会（春の大会のプログラム編成）まで、というのがだいたいめやすになると思う。

形式的には従来大会のやりかたにごくわずかな変形を加えたにすぎない。しかし、二つの方向の発展が期待できると思う。一つは、新しいわく組みが、試行錯誤の末、通常のセッション分類に加わることである。もう一つは、その時々「熱い」話題について機動的に集中討論の場を作ることである。

2. なぜ「地表面・大気相互作用」か

5月号にのせた趣旨は同号（講演企画委員会からのお知らせ「スペシャル・セッション」試行について」、311頁）を参照していただくとして、これに筆者個人として補足する。「地表面・大気相互作用」は、集中的に討論するテーマとしては大きすぎる。むしろ、こういうわく組みでものをとらえることが学会の中で普通になってほしい、という、1節最後の段落での第一の方向をねらったものである。背景として、第一には、大規模気象の研

究の中で地表面との水や運動量のやりとりが重視されるようになってきたにもかかわらず、そういったものを以前から扱ってきた境界層気象の研究者と同じ場で議論する機会が少なかったこと、第二には、大気からのフラックスに対する植物や土壌などの応答を考えることは気象学会をおもな活動の場としていなかった人との共同作業を必要とするが、そのための足場がほしいこと、第三には、現在「気候」の分類に申し込まれてくる講演が（体感温度から巨視的な数理気候モデルまで）雑多で、ある程度話題にまとまりのあるセッションを作る方向での再編成をするべきだと感じたこと、がある。

「気候」を大気の統計的性質ととらえるか、海洋、雪氷、植生、土壌などを含めた地球表層系としてとらえるか、は人によって違うだろう。しかし、大気をさすとしても、気候の形成と変動を考える上では、他の系と相互作用する系としてとらえる必要があることがしだいに認識されてきた。U.S. Committee for GARP (1975) の“Understanding Climate Change”の「気候システム」の概念図がよく引用される。しかしこの図では陸面の状態に注目していない。

一方、境界層の気象や、農業や建築に関係した応用気象の分野では、地表面状態が局地的な大気の状態に影響することはよく知られていた。また古気候の研究では、大気の状態が植生や微地形などに影響を与えることを前提として、化石や地形を調べていたわけである。

大規模気象の研究者が地表面、特に陸面からの影響を重視するようになったのはわりあい最近のように思われる。数値予報の期間が延長されるようになって、陸面からの摩擦や蒸発をかってに与えたのでは予報に偏りが生じることがわかったせいもある。また、サヘル干ばつや、「CO₂がふえると土壌水分はどうなるのか」、「熱帯雨林の木を切ったら広域の気候に影響があるのではないか」といった環境問題の観点からも関心が高まってきた。またエルニーニョに代表される海洋・大気結合系の研究が発展してきて、陸面をも含めた結合系を考えることも現実性がでてきたように思われる。

自由大気の研究が地表面をどう扱うか考え、境界層の研究者が気候研究にどう貢献するかを考えると、両者の目標はかなり重なってくる。春の大会のシンポジウム「気候変動と生物圏」で提供された話題のうち3件は、大気と地表（特に植生）との間の熱・水フラックス、およびその大規模大気への影響に関するものであった。今
(p. 440 へつづく)

月例会「レーダー気象」の講演募集のお知らせ

標記月例会を下記の通り開催いたしますので奮ってご応募ください。

記

日時：1988年12月20日（火）

場所：気象庁

申込方法：題目、講演者氏名、所属と要旨を横書き400

字詰原稿用紙1枚にまとめて提出。

申込先：〒305 茨城県つくば市長峰 1-1

気象研究所台風研究部 榊原 均

TEL. 0298-51-7111 内線 526

講演申込締切日：1988年8月25日

京都大学超高層電波研究センター共同利用研究の公募のお知らせ

当センターでは、現在昭和63年度後期（63年10月～64年3月）の共同利用研究課題を公募中です。

共同利用研究の中心的設備となる MU レーダーは我が国最初の中層・超高層大気観測用 VHF 帯大型レーダーです。また、他に共同利用に供される設備としてはアイオノゾンデ、二周波レーダー、ラジオゾンデ等がありま

す。

利用を希望される方は、下記に御問い合わせ下さい。締切りは昭和63年8月13日です。

〒611 京都府宇治市五ヶ庄

京都大学超高層電波研究センター事務室

TEL. 077-32-3111 内線 3330

大型レーダー国際学校（ISAR）国内旅費補助について

「天気」4月号で既にお知らせしておりますが表記会合が本年11月24—28日の間京都大学超高層電波研究センターにより開催されます。参加予定者で国内旅費の一部補助を受けたい方は下記の通り書面（適当に作成して下さい）にて御申込み下さい。ただし予算上全員の方の御希望には沿えないこともありますのでその際は御容赦下さい。

記

補助の額：11月23—28日（5泊6日）の滞在費のみ

50,600円、（ただし院生等の場合額は40,000円になります。）

人数：約20名

記載事項：氏名、所属機関名、官職、級号俸（院生の場合は専攻科名、学年）

申込期日：昭和63年9月30日（厳守）

申込先：〒611 宇治市五ヶ庄

京都大学超高層電波研究センター

深尾昌一郎

(p. 456 からつづく)

回のテーマ別セッションもこれを引き継ぐ議論を主要部分としたい。しかし、ややまとまりを欠くことにはなるが、(春のシンポジウムで森山氏の紹介されたような) 大気成分と生物圏とのフィードバックとか、あるいは地

形形成にかかわる侵食・堆積の営力を大気がどれだけ制御しているかといった、これまで気象学会で話題になりにくかった主題も、積極的に受け入れていきたいと思う。